製糸夏期大学63年のあゆみ

製糸技術研究会　会長　髙林　千幸

はじめに

この製糸夏期大学は、（独）農業生物資源研究所及び製糸技術研究会が主催し、今年で 63 回目となりました。これもひとえに岡谷市をはじめ、協賛・後援をいただいた関係団体、業界の皆さん、講師の先生、聴講者の皆さん、製糸技術研究会を支えて頂いた皆さんのお陰と深く感謝申し上げます。

昭和 23 年８月に第１回目の製糸夏期大学を開催して以来、蚕糸試験場岡谷製糸試験所、現在の（独）農業生物資源研究所生活資材開発ユニットが事務局として 63 年間開催してきましたが、当ユニットが平成 23 年 3 月末でつくばの本所へその機能を移転することとなりました。これまで製糸技術研究会役員会で来年の平成 23 年以降の夏期大学のあり方、存続方法等幾度となく検討し、関係者に相談をしてきましたが、事務局が岡谷不在では今後継続することは難しいとの結論に達し、第 63 回の製糸夏期大学をもって閉講することとしました。

本講では、これまでの製糸夏期大学の歩んできた道について、その概要をお伝えします。

１．閉講に当たって皆様からのお言葉

昨年の第 62 回製糸夏期大学の開講挨拶で 63 回を持って製糸夏期大学を閉講したいと皆様にお伝えしたところ、「これからも是非続けて行って欲しい。毎年この夏期大学を楽しみにしていたのに残念。拠り所がなくなってしまう。63 回も続けてきたものをここで止めるのは惜しい。地元岡谷市としてもこうした全国レベルの歴史ある講演会が終わるのは非常に残念、何とか存続する道はないのか。」等々、皆様から数々の惜しむ言葉を頂戴しました。

今年、製糸夏期大学最終記念の案内を皆様に配送した後も、閉講を惜しむ数々の電話や手紙、電子メール等を頂き、またこれまで続けてきたことへのねぎらいのお言葉も頂きました。製糸夏期大学を閉じることは、私ども主催者としても後ろ髪を引かれる思いで、残念でなりません。

お手紙を頂いた方の了承を頂いて、その一部を以下に掲載させていただきます。

『先日は、第 63 回製糸夏期大学（最終記念）開催のご案内を頂きまして、有り難うございました。長年にわたり製糸事業についても有益なご指導と勉強の場としてお

世話になりまして、心より感謝申し上げます。特に私の場合生涯を製糸の道に歩んだ者にとりまして、夏期大学からの恩恵は多大なものがありました。また、戦後再スタートした蚕糸業は平和産業を目途として、近代化事業の確立と國の発展の為に官・民協力して研究開発に英知を結集して来ましたが、時代の変遷進歩の良否は別として、今日の蚕糸業も当然の現象とは言え、一抹の淋しさは禁じえません。今後の蚕糸絹業としては、世界的共有のシルク産業のリーダーシップを摂ると共に、過去の形式にとらわれず、政治・経済的にも難しい情勢下にあると思いますが、新しい方向性を模索追求され、社会発展のためにも一層のご健闘をお祈りして止まない次第であります。製糸夏期大学の精神（心）が今後とも生き続けることをお祈り致します。』

本当に温かなお言葉を頂きました。紙面の関係上この方以外のものは省略させて頂きますが、お声を寄せて頂いた総ての皆様に感謝申し上げます。

2．「製糸夏期大学63年のあゆみ」について

今回の製糸夏期大学は最終記念として、式典、記念講演、懇親会を計画するとともに、皆様の思いを綴っていただくために、記念誌「製糸夏期大学 63 年のあゆみ」を刊行しました。大変多くの皆様より寄稿して頂き、立派な記念誌とすることができましたこと、厚く御礼申し上げます。

その中で「製糸夏期大学 63 年を振り返って」という項を私に頂きましたので、「63年のあゆみ」につきましては、その項で記載させていただきました。内容は下記の通りです。

1．製糸夏期大学の起源
  1)発足当時の時代的背景
  2)岡谷製糸試験所の誘致運動
  3)製糸夏期大学の設立
  4)第1回目の製糸夏期大学を開催した諏訪製絲研究會とは
    (1)母体となった製糸同盟
    (2)諏訪製絲研究會の発足
2．製糸夏期大学の運営
3．第63回までの講演概要

3項目目のこれまでの講演につきましては、それぞれの回次について、その概要を掲載しましたが、総ての講演については枚数の関係もあり、掲載することはできませんでした。その項の最後に「製糸夏期大学講演課題一覧」を載せておきましたので、参照していただければ思います。私共の図書室には第1回から前回の 62 回までの教材（写真1）とこれまで 50 回、60 回時に発刊した記念誌（写真2）は総て保管して

あります。

写真１　１回～62回までの教材

写真２　50周年記念誌及び60回記念誌

３．これまでの製糸夏期大学の概要

1)講演数・参加人員

１回～ 63 回の中で、シンポジウム（研究会、座談会、討論会、パネルディスカッション）を含めた総ての講演数は 432 課題（平均 6.8 課題）、シンポジウムは 22 回開催されています。

表１は、これまでの参加人員の推移を示します。記念誌には折線グラフで掲載しましたが、初回は 117 名で、その後上下しながら第 11 回には 215 名、第 23 回には 272 名に達し、それを頂点として減少し、第 34 回からは 100 名台になっています。

第 49 回は 182 名の出席を頂き、その後減少し第 56 回（平成 16 年）にはじめて 100 名を割り、94 名となりました。

第１回から第 62 回までの総参加人員は延べ 10,332 名であり、開催を中止した第 59 回を除いた平均の参加者数は 169 名となっています。

表１　開催回次別聴講者数の推移

年　度	回　次	参加人数	年　度	回　次	参加人数
昭和23	1	117	昭和55	33	236
24	2	177	56	34	164
25	3	102	57	35	181
26	4	181	58	36	173
27	5	110	58	37	166
28	6	168	60	38	163
29	7	137	61	39	147
30	8	162	62	40	142
31	9	142	63	41	159
32	10	166	平成元年	42	149
33	11	215	2	43	161
34	12	169	3	44	136
35	13	169	4	45	138
36	14	174	5	46	114
37	15	173	6	47	131
38	16	195	7	48	128
39	17	192	8	49	182
40	18	191	9	50	149
41	19	205	10	51	106
42	20	227	11	52	113
43	21	232	12	53	112
44	22	249	13	54	124
45	23	272	14	55	129
46	24	243	15	56	94
47	25	222	16	57	102
48	26	210	17	58	106
49	27	227	18	59	-
50	28	254	19	60	140
51	29	241	20	61	110
52	30	237	21	62	106
53	31	271	22	63	
54	32	231			

2)講演の内容

第1回は製糸の基礎理論を中心とした内容で、東京大学、上田繊維専門学校、京都繊維専門学校、東京繊維専門学校の先生に講演を頂きました。まさに製糸の大学と呼ぶにふさわしい内容からスタートしています。その後、繭検定・生糸検査格付・原料繭・繭乾燥・製糸経営等、蚕糸試験場及び大学の研究者を始めとする広範な分野から講演を頂きました。第6回（昭和 28 年）には初めての座談会が行われ、自動繰糸機の現状と将来について活発な議論が行われました。また、その頃から生糸品質の問題が取り上げられ、煮繭から繰糸に至る各工程と品質問題が論じられています。第 11 回（昭和 33 年）には自動繰糸機に関する問題が取り上げられ、座談会いおいて“たま式”と“恵南式”自動繰糸機について活発な議論が行われました。その時の白熱した議論は、自動繰糸機の開発の歴史に残るものと言っても過言でなく、今でも語り草になっています。

第 11 回（昭和 33 年）から第 29 回（昭和 51 年）までは、毎年その時節に問題となっているテーマを取り上げシンポジウム（座談会、研究会、討論会）が行われました。テーマは、乾繭、煮繭、糸故障、繰糸速度、飛び繊度防止、製糸能率増進、生糸束装法、揚返し・仕上げの合理化等、その時代で問題となっていることについて議論されました。パネラーは工務担当者を中心としていたため、地に付いた討論が行われ、その内容は事務局によって別冊としてまとめられ、後日出席者に配布されました。現在、事務局にはそれらすべて保存してありますが、一読してその当時活発に議論された様子を伺い知ることができます。

このようにシンポジウムが行われた年は、その時点での話題が絞られていましたが、第 30 回（昭和 52 年）以降は繭の効率的生産、蚕糸情勢、絹新素材開発、絹需要などの講演内容が多くなっています。第 30 回では記念式典は行いませんでしたが、第1日目終了後に第 30 回製糸夏期大学記念祝賀会を開催しました。製糸夏期大学の設立にご尽力頂いた古村敏章氏及び吉田良三氏から乾杯及びご挨拶を頂きました。

第 31 回（昭和 53 年）では、最近の煮繭技術について煮繭メーカー7社から「最近の煮繭技術の実際」というテーマで、メーカー独自の煮繭理論とそれに基づいた煮繭機構について、各社社運をかけたような迫力のある講演でした。会場からも活発な意見が出され、30 年経ってもその時の様子が鮮明に蘇ってきます。第 32 回（昭和 54 年）からは、糸故障の自動修理装置、あみその自動化、煮繭機の自動起動停止装置、自動索抄緒機、自動給繭機、生糸の直繰チーズ巻、煮繭・繰糸管理の自動化、煮繭のシステム化、繭の煮熟状態の計測制御化などの工程の自動制御化、工程管理、計測化などの課題が多く行われるようになりました。

第 40 回（昭和 61 年）では、シルク新素材に焦点を当てた講演で、それ以降外国から輸入される生糸に対抗するために日本独自の絹素材を作出やそれに適応する蚕品種の育成、絹本来の持っている機能性を生かした素材の作出や製品開発の話題が目立つようになってきました。第 40 回では、記念式典は行いませんでしたが、第 1 日目終了後に祝賀会を開催しました。

時代の流れとはいえ、製糸工場数も年々減少し、第 49 回（平成 8 年）には「蚕糸業の生きる道」と題し、養蚕、製糸、絹業、研究のそれぞれの立場からの何らかの活路を見出していきたいとパネルディスカッションを開催しました。第 29 回に研究会と称する討論会を開催して以来 20 年ぶりの開催でした。時間の経つのも忘れ活発な議論が行われたのも記憶に新しいところです。

第 50 回（平成 9 年）では、製糸夏期大学 50 周年記念として、記念式典、記念講演、祝賀会を挙行し、また記念誌を発刊しました。記念式典では、来賓には後援いただいた 5 団体、歴代会長 3 名、記念講演講師 5 名、50 周年に寄せての寄稿者 8 名を招き、岡谷市長（林新一郎氏）、農畜産業振興事業団副理事長（武智敏夫氏）、長野県製糸協会長（味澤與重氏）より祝辞を頂きました。その後、それまで後援を頂いた 7 団体（岡谷市、長野県製糸協会、長野県製糸技術研究会、岡谷商工会議所、岡谷蚕糸団体連合会、日本製糸協会、日本生糸販売連合会）に感謝状及び記念品の贈呈を行いました。そして、これまでの製糸夏期大学の発展に貢献していただいた小野四郎先生（8 回講演）、嶋崎昭典先生（11 回講演）に特別表彰を授与致しました。祝賀会では、東京大学農学部長の小林正彦先生に乾杯の音頭をとって頂きました。宴会では岡谷木遣り保存会の皆さんにより諏訪大社御柱祭の木遣りを披露して頂き、大いに盛り上がりました。

第 51 回（平成 10 年）からは、製糸技術の問題から用途開発へ、また流通面、ファッション面などの話題が多くなってきました。製糸夏期大学も時代の要請に応えるような形にしなければと思い、私どもの製糸技術研究会で議論を重ね、製糸を中心とした枠から、蚕品種、桑、養蚕、製糸からファッションにいたるまで、シルクに全般に関する分野を網羅したセミナーにしたいとの趣意で、第 52 回（平成 11 年）からは、名称を 20@@ Silk Summer Seminar in Okaya　－第〇回製糸夏期大学－に変更し、新たに出発致しました。これには国内を対象とするばかりでなく、希望を大きく掲げ国際的なセミナーに発展させていきたいと言う願いを込めて命名しました。

第 55 回（平成 14 年）には、ブラジル、中国から講師としてお越し頂き、それぞれの蚕糸業の現状と課題について講演をして頂きました

本夏期大学は、第 58 回目までは、一度も休むことなく開催してきましたが、平成 18 年の第 59 回は、開催の前日岡谷市始まって以来の豪雨にみまわれ、当日、交通機関

が総てストップし、急遽中止の事態となりました。天災とは言え、私ども担当者一同、準備を重ねてきただけに無念の思いで一杯でありました。既に教材を作成し、聴講を予定しておりました皆様には後日総てお届けしましたので、第 59 回は開催したものとして、平成 19 年に第 60 回の製糸夏期大学を開催しました。

60 回の節として記念誌の発行、記念式典、記念講演及び記念祝賀会を開催しました。記念誌には、祝辞、製糸夏期大学 60 回に寄せて、製糸夏期大学 60 年のあゆみ、記念寄稿、特別寄稿、60 回までの講演課題一覧等を載せました。教材部分も含め、60 名に執筆して頂き、380 ページの記念誌となりました。そして、1 日目の夕刻には 90 名参加のもと盛大に記念祝賀会を開催しました。

開催当初は、製糸関係者が大半をしてていましたが、時代の変遷の中で、セミナーへの出席者は、シルクへの思い入れを持っている方や工房等での絹製品作りなど地域に根ざして活動している方々が増えてきました。シルク全般に関する技術交流や仲間づくり、情報交換の場へと育てていただきました。こうして 63 年を振り返ると、その時代時代で問題になっていたこと、解決しなければならないこと、またこれからの技術として開発しなけばならないことなどを読み取ることができ、行政分野、研究分野、業界が一体となってその時その時の問題を真摯に議論し、取り組んできた姿をあらためて知ることができました。

おわりに

日本の製糸技術を振り返ってみると、どこの国でも真似の出来ない世界に冠たる技術を日本が蓄積してきていますが、現況では日本の宝の製糸技術すら風化しかねない状況になっています。新たな製糸技術の開発とそれによる優良生糸の効率的に大量生産するために議論してきた製糸夏期大学の歴史的役割は終わったと言われればそれまでですが、世界に冠たる養蚕業・製糸業・絹業が現存しているのは事実です。これからもそれを維持するというよりも、更に発展させていかなければならないと思います。

また、全国には蚕糸・絹業を専業でされている方以外に、シルクで染織活動をされている方やサークル活動をされている方、地域で新たに養蚕に取り組もうと考えている方、カイコで学習活動をされている方などシルクに想いを寄せている方が多くいます。この岡谷でも「25 年ぶりに養蚕を復活させよう！」という気運が高まっています。製糸夏期大学で培ってきた専門的な技術レベルには程遠くても、その技術を守り続けることが、これからの使命と思っています。V 字曲線を描く時代が必ず到来すると確信しています。

最後になりましたが、永年この製糸夏期大学を見守り、育て、ご指導・ご協力を頂き、叱咤激励を頂きました総ての皆様に感謝申し上げます。